座談会・議会常任委員会のしくみとその仕事

産業経済常任委員会 しくみとその仕事

これまで議会に設けられている総務など三つの常任委員会の役割りといったものについて、それぞれの委員の方たちとはなし合いをもち紹介してまいりましたが、最後に市民のくらしを豊にし、市政に活気をもたせようと努力している産業経済常任委員会について、スポットを当ててみました。

すすまぬ構造改善事業

若き人たちに期待する

▼市を発展させるための産業に対する理念対策としては、現在まとまってはいない。

そうした面へむかって進むべきであるということで、市の事情を見てまわりいろいろ計画をたてることにしている。しかし商工、観光、農業などすべて経済面に通じ、広範囲にわたっているため手が伸びなく具体策はできていない。

▼産業経済面の重要性は叫ばれてきたが、その対策としてこれといったものはいままでもなく、そのため各種事業団体などと話し合いをもって、なんらかの施策を立案したいと努力している。

▼いままで産経で行なった事業といえば里山開墾、東沢のかさ上げなど農業対策に多く、水産業では未完成であるが久枝漁港の着手などがある。

▼いま問題となっているものに中央地区の農業構造改善事業がある。これは、一昨年十二月から西島地区（長岡）二十町歩を対象に改善事業を行なうようにとりかかったもので、先進地の視察、その道の権威者池本先生を招へいし、話を聞くなどして、地元の農民は、当初はきそっていたが、いまは振り出しに戻った感じである。

▼一時は西島以下一帯瀬川、吉田を含めた六十町歩の耕地を対象に、一億五千万円の工費で行なうということにまで発展していたが、またもとにもどり甘枝、西島の三十町歩の改善を計ろうと、地元と話し合いを進めている。

▼しかし、当初にあった実施への気運もしだいに下火となり、逆に反対するものや、現状のままでよいというものができ暗礁に乗りあげている。

▼改善への気運が盛りあがりをみせない原因は、用・排水の問題で、六十町歩の予定がもとの三十町歩になったのも排水溝が原因だといわれており、残りの三十町歩についても!!農家に負担がかかる、耕地を農道に取られる!!などということにあるようだ。

▼こんど行なおうとしているのは基盤整備事業で耕地を一枚三反単位に整備し、機械化による農業を行なうようにしようとするもので、将来を考えればよいことは判ってはいるが、現状でも結構やれている、だからそんなことに経費を出さなくてもというこことにあるようだ。

▼南国市の農業は、恵まれた地の利に立っており、構造改善事業をすすめようとするには相当困難さがある。しかし将来のことを考えるとやらなければならないことである。

▼若い人たちの間では構造改善事業に期待しているようであるが現状のままではなかなか困難な問題が山積しているようである。

後継者をつくろう

▼市内には四千九百戸の農家、八百六十戸の商家があるが、いずれも衰微の一途をたどっており、また老令化の傾向にある。南国市における農業従事者の年令構成は、十六歳から十九歳までが二十九人、二十歳代が百五十人、三十歳代が五百五十人、四十歳代五百二十人、五十歳代五百人、六十歳から六十四歳までが三百九十人、六十五歳以上が七百四十人と六十歳以上が千百人余りあり、老令化を示している。

▼また、農家の青年に嫁の来てがないことも農業後継者がないことにつながっているのではなかろうか。

農業にとどまる青年に張り合いをもたせるためにはおきざりにされ、見すてられている農家の嫁を確保するための施策を考え、力こぶを入れるべきだ。西日本一の田園都市を標ぼうしても、やり手がなくてはなんにもならない。

▼父兄たちのどん欲さが後継者をなくしている。はげしい労働をみて、いやぞいやぞという恐怖心を抱き、後継者や嫁になることを嫌うようだ。

▼農業経営も米一式のむかしと違い、オートメーション化され、労力がいりだした。冬の間は遊んでいたが、いまでは他へ働きにいったり、換金作物やビニールハウスなどとうるさく体を使っている。金のために働き、遊ぶ余裕がなくなるなど、農家に無理がいっている。

▼給料制にするとか、子供にはやくゆずり責任をもたすこともかえって好結果を得ている。また二～三反を作らせて、それからの収入は自由に使わしてやること、若い者に張り合いをもたすことになるだろう。

▼後継者の問題は農家のみの悩みではなく、商家でも進んで跡を取ろうとするものがなくなり、引きとめ策を真剣に考えているものもある。

産業経済常任委員会の委員

長　吾茂
長　亀藤
員　淵川
員　溝木
委員　福口
委員　高永
委員　井川
委員　徳江
委員　小鈴
延清雄水郎
正安良
次潤

産業経済常任委員会の仕事は、産業経済の振興に関することがらについて審議するもので、委員の定数は七人です。

産業経済常任委員会のしくみ

この委員会の所管となっていることがらは、

農業、林業及び畜産業に関すること、

水産業に関すること、

商業、工業及び鉱業に関すること、

主要食糧に関すること、

耕地改良、開拓に関すること、

観光に関すること、

漁港、海外移民に関すること、

その他産業経済の振興に関すること、

そのため次第に地価が値上がりをみせはじめ、耕地の獲得がむつかしくなった。

▼零細農家をなくすることが国の方針だが、現実では零細農家が増え自立農家をつくることはむつかしい。

▼みかんにしてもあと五年すれば価格が相当落ちてくる。その対策として面積を大きくして経営する必要がある。また、米の増収運動をことしから四十五年にかけて、十四地区十九集団（一集団五㌶）の圃場を選定して行なうことになっている。

▼三反一五反という零細的な水田経営では一家を養うことはできない。市として市民の福祉を重点的に考え、工場を誘致し、地元で働く場所を与えるべきである。

▼産業経済費は五千万円でそのうちの四千万円は補助事業にあてられており、市独自の農業育成化のための予算がない。

▼職業にも波がある。現在、大工や左官などになり手がないようだが、これからやればよくなると考えられている。また、農業にしても将来大いに望みがもたれている。

▼市政をたずさわるものは、政治家であり、事業家でなければ市政はやってゆけない。職業紹介を市自体でも行なうべきだ。

議会常任委員会の

さびれ行く後免町

発展に善後措置を

▼この頃のごめん町はさびれてきた。その原因は高知市が近く、しかも商品が豊富にあって、安く買えるという考えが市民にあるからだ。

▼ごめんの商店にも安くてよい品もある。そのような考えは改めて地元の商店を利用してほしい。

▼高知市へ行くもう一つの面は、買物のついでに骨休みとして、たのしめる映画や、ごらくの施設があることも見逃がすことはできない。

▼三つのスーパーがつぎつぎとでき、競争がはげしくなってきた。そのため一般の商店は苦しくなったようだ。といってやめることはできない。その対策として小さい商店は協同して大きなセンターを作り、なにか別の仕事について家の経済をもたすことや、有名なしにせと契約を結び、そこの商品の販売をするなど考えてみてはどうだろう。

▼にぎやかな娯楽施設もないごめん町では、人のあつまることを考えなければ町の発展はのぞめない。たとえば農機具祭のみで終らないなる農機具祭のみで終ってみる必要がありはしないか。

零細農家をなくそう

職業指導所をつくれ

▼農業保働力の老令化とともに農地が細分化されている。市内約五千戸の農家のなかに三町以上の耕作者は四戸で、二町から三町までは四十二戸、一町五反から二町までは二百六十九戸、一町から一町五反までが九百二十三戸、七反から一町までは九百六十七戸、五反から七反までは七百九十七戸あり、五反以下は約二千戸を数えている。

▼一町以下の耕作では専業農業としての経営はむつかしい。だから他のしごとを兼ねるようになったり、若いものが他で働くようになった。

▼高知市周辺の地価が上がるにつれて耕地を手ばなすものが増え、その代替の地として、南国市などで農地を求めるものが多く、

6月は　県市民税・国保税

（才3期）の納期です

30日までにかならず指定金融機関

（農協、信連）へ納入しましょう。